

スポーツ教育論の基礎思想研究

A Study on the Fundamental Philosophy for the Theory of Sport Education

高橋 徹*, 井上 誠治**

Toru TAKAHASHI* and Seiji INOUE**

ABSTRACT

The purpose of this study is to explore the new theoretical framework needed to further the theory of sport education. Furthermore, it attempts to re-evaluate pragmatism in terms of experience, environment and educational concepts as it's the theory's core ideas. First, in regards to the re-evaluation of the idea of pragmatism, we must understand the theory of sport experience in terms of J. Dewey's theory of experience. Then, the theory of sport environment must also be re-evaluated under the basis of J. Gibson's proposed concept of affordance. Then, while re-evaluating the concept of education in pragmatism, an ideological position forming the basis of the new theory of sport education is to be established. In other words, we attempt to seek out a position or stance on the furthering a new theory of sport education from current educational problems.

Key words; theory of sport education, sport experience, pragmatism

I. はじめに

近年、体育・スポーツの研究領域において、スポーツの教育の在り方をめぐる議論を反省し、それを現代的問題から再評価する動きが見られる。例えば、体育・スポーツ哲学分野では、経験としてのスポーツの価値を評価すること、すなわちスポーツを何かの手段的に捉えその結果を評価するのではなく、手段-目的関係に支配されないことのない、その経験過程に見出される多様な意味を評

価するという視点が提示されている^{3) 12) 23)}。また、体育科教育分野では、身体知の視点を体育実践へと導入し、いわゆる既存の「体育」を反省する⁶⁾ 試みも展開されている^{12) 20)}。これらは従来のスポーツの教育の在り方を発展的に再構築する試みとして捉えることもできよう。

本研究は体育・スポーツの研究領域におけるこのような動向を踏まえ、スポーツ教育論の新たな理論的枠組みを構築する基礎思想研究の一つの試みである。それは、理論的基盤としてのプラグマ

* 国士舘大学体育学部附属体育研究所 (Institute of health, physical education and sport science school of physical education Kokushikan University)

** 国士舘大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

ティズム思想の経験、環境、教育概念を再評価し、その議論の発展可能性を提示することでもある。プラグマティズム思想の教育理論については、教育学の研究領域におけるその有効性の検証の試みにあって、最近その思想が再評価されつつある。1980年代以降の「プラグマティズム・ルネッサンス」²¹⁾と称される研究動向は、特にJ.デューイ思想に対しての再評価が顕著である。体育・スポーツの研究領域においても、戦後日本に「進歩主義教育」として受容されたデューイの教育論は、特に経験概念の解釈をめぐる議論にあって、その理論が正当に評価されることはなかったとされる⁷⁾。よって、スポーツ教育論の理論的基盤をプラグマティズム思想に求め再評価することは、その理論の新たな展開を導くための一つの手がかりとなるであろう。

II. 研究目的

本研究の目的は、スポーツ教育論の新たな理論展開を方向づけるための道筋をプラグマティズム思想の再評価に求め、その議論の発展可能性を検討することである。それは、既存の枠組みを超えたスポーツ教育の在り方を提示する理論化モデルを構築する試みでもある。

本稿では、まずプラグマティズム思想におけるJ.デューイの経験概念を再評価し、スポーツの経験概念として読み解くことの有効性を検討する。また、J.ギブソンの提唱したアフォーダンス理論における環境概念を再評価し、そこから援用されるスポーツの教育環境のアフォーダンスを考察する。そして、プラグマティズム思想における教育概念の再評価を通して、スポーツ教育論の新たな理論展開の可能性を基礎思想研究に求めることの妥当性を示すことが本稿の目指すところである。

III. プラグマティズム思想と経験概念の再評価

プラグマティズム思想は日本の教育に大きな影

響を与えた思想の一つである。特に、戦後のアメリカ教育使節団による教育改革によって、日本の教育はプラグマティズム思想の教育理論を受容しつつ、それに基づく教育方針へと転換することとなる。その教育理念の基盤には、アメリカの進歩主義教育運動の一つであるNew Education（新教育）の考え方があり、それを先導したのが、デューイを中心とするプラグマティズム思想の教育理論である。本節では、デューイの教育理論における経験概念を再評価し、それをスポーツの経験概念として読み解くこととする。

プラグマティズム思想は、戦後の教育改革と関わって、教育学の分野を中心に独自の研究が行われている。特に、教育学を専攻する研究者がデューイ思想を総合的に研究し、成果を残すことで、哲学の分野においてアメリカ哲学を専攻する研究者が比較的少ないという現実をカバーしてきたとされる⁵⁾。従って、プラグマティズム思想研究は、哲学の領域に限らず、教育学、特に教育哲学の領域において顕著である。他方、体育学の研究領域におけるプラグマティズム思想に関する研究は教育学に比して限定的である^{注1)}。プラグマティズム思想、そしてデューイをはじめとするプラグマティストについて論及する研究が見られるようになったのも最近のことであり、それは教育と同様にその思想に対する再評価への動きとして捉えることもできよう。

デューイの理論展開の中心は「経験」、および「教育」概念であるが、その「経験」概念の特徴は「相互作用の原理」と「連続性の原理」に集約される。デューイによれば、経験は有機体と環境との相互作用によって生じる結果であり^{注2)}、そのような経験が過去－現在－未来へと連続的に繋がっているとされる。彼はこの議論を通して、経験の生成過程、および教育の過程を明らかにしつつ、経験の積み重ねの結果として教育は生じると結論する。デューイの理論に依拠するならば、スポーツの経験の過程もまた教育の過程と無関係ではないのである。

デューイは経験を、真空のなかで生起するものではないとし、その源を個人の外側に規定している¹⁾。すなわち、あらゆる経験の源となるものは、環境とそこに生存する有機体との相互作用であり、この相互作用の不断の連続こそが全ての経験を構成する源泉なのである。この「相互作用の原理」と並び、デューイの経験概念の特徴とされる「経験の連続性」とは、過去の経験が現在そして将来の経験へと影響を及ぼすことを意味する。それはすなわち、人間は常に経験しているということであり、その中で環境に働きかけ、それによって変化する環境からの働きかけに応答し、さらに環境に働きかけ返すという繰り返しの連続によって人間は生活しているということである^{注3)}。過去－現在－未来へと繋がる相互作用の不断の連続が経験の「連続性の原理」である。

デューイによれば、人間と環境との相互作用の結果生じる経験は、二つの段階によって構成される。人間はまず「第一次経験」という思考の介入しない直接的経験の後、それを対象とした思考の介入を伴う「第二次経験」、すなわち反省的経験に至る。そして、派生的産物としての「第二次経験」は再び日常の直接的経験、すなわち「第一次経験」の中に取り込まれ、そこでの経験を制御することを可能にするのである^{注4)}。デューイの経験概念では、「第一次経験」から「第二次経験」への移行のみならず、「第二次経験」から「第一次経験」への移行過程も示されており、これら二つの段階の往復関係が繰り返されることにより経験は豊かな意味を持つとされる。

デューイの経験概念に倣えば、スポーツの経験は運動する身体と環境との相互作用の不断の繰り返しの連続によって生じており、その経験の過程には「第一次経験」という直接的経験から、反省的経験である「第二次経験」へと至る二つの段階が存在する。これら二つの段階を通して、人間は反省的思考の介入をもって、連続するあらゆる直接的経験の中からスポーツの経験を取り出し、それを一つの統一体として認識する。そのように統一

され、一つに括られるスポーツの経験こそがデューイのいう「一つの経験」である。「一つの経験」とは、経験されるものが順調に完成に達するという経験であり、種々の経験の中でも、特に他の経験から区別される経験を意味している²⁾。

スポーツの経験を構成するのは運動する身体と環境との相互作用の不断の連続であるが、スポーツは非日常的な活動であるが故に、運動者には単なる日常の生活とは異なる形での環境の克服が求められる。そこにおいて運動者は、新たな「一つの経験」を獲得し、それを基礎としてさらなる経験を積み重ねるという状況に直面する。すなわち、スポーツという活動は常に流動するものであるが故に、そこでは絶えることのない環境との相互作用が生じ、運動者には常に環境の克服が求められるのである。そして、「一つの経験」としてのスポーツの経験は、次々と連続して生起する他の経験と交じり合ったとしても、他の経験の様に忘れ去られたりせず、それは意味を持った既知の経験として経験者の中に蓄積され、後の経験へと連続的に持ちこされる^{注5)}。従ってそれは、既知から未知へ、未知から既知へという経験の連続的再構成の過程、すなわち相互作用が累積する無限の発展過程を自己更新の成長過程であるとするデューイの「教育」概念そのものなのである。そして、この経験の積み重ねを通じた成長過程こそがデューイの示す教育過程なのである。

デューイの経験概念の再評価を基に、スポーツを新たな経験の獲得と絶えざる成長過程のプロセスと捉え、そして手段－目的関係に支配されることのないスポーツの経験それ自体に内在する多様な価値を考慮すれば、スポーツの経験の過程は教育の経験の過程と無関係ではないのである。「経験の連続的再構成の過程こそが教育（成長）の過程である」というデューイの見解に従えば、スポーツする人間はその経験を通して、自分自身の成長のプロセスに触れ、さらには学びのための方法を習得する。それこそが、デューイが目指した経験を通しての教育の一つの到達点であり、それは

またスポーツの教育の目指すべき着地点を映し出しているとも言えるのである。

IV. アフォーダンス理論と環境概念の再評価

人間のスポーツする環境を豊かな経験を育む場として見つめ直す時、プラグマティズム思想の系譜にあって、特に環境について言及したギブソンの知見が参考になろう。ギブソンによって提唱されたアフォーダンス理論は、デューイの経験概念の延長線上にその理論展開を見ることができる。アフォーダンス理論は、近年、建築学や教育学の研究分野に適用され、その再評価が顕著である。本節では、アフォーダンス理論に依り、スポーツの教育環境の在り方について考察する。

「アフォーダンス (affordance)」という用語は、ギブソンの心理学研究の中心を成す概念として、人間と環境の相互依存性を表わす造語である。ギブソンはそれを、「環境が動物に提供する (offers) もの」⁴⁾と定義し、既存の用語では表現し得ない仕方では環境と動物の相補性を言い表している⁴⁾。

例えば、空気の「アフォーダンス」は呼吸作用、水の「アフォーダンス」は飲むこと、あるいは泳ぐこと、地面の「アフォーダンス」は立つこと、歩くこと、走ることなどである^{注6)}。同様にスポーツ場面では、水泳選手にとっての水のアフォーダンスは、掴む、押す、叩く、蹴るといった動作である。また、地面は体操選手が着地する際には足で掴むことをアフォードし、陸上選手が走る時には、ただ走ることだけでなく、足で押すこと、足の裏を引っ掛けることなどをアフォードする。

このように、環境にあって行為それ自体が発見する意味がアフォーダンスであり、ギブソンによれば、環境にある全てのものがアフォーダンスを持つとされる⁴⁾。すなわちアフォーダンスとは、動物の行動に関わる環境の特性であり^{8) 10) 11)}、動物の行為の資源なのである¹⁴⁾。従って、それは

「生態学的環境」^{注7)}の性質を表わし、動物の行動にのみ関係した環境の性質ということである。

佐々木¹⁴⁾によれば、アフォーダンスとは行為することで理解し、利用することのできる環境の性質であり、それを利用することで人間(動物)は行為を進化させてきたとされる。また、田中¹⁹⁾はアフォーダンス理論について、環境は様々な行動可能性を人や動物に提供(アフォード)していること、そして人間の様々な行動は環境がその可能性を準備していることで成立する点に注目している。よって、アフォーダンスとは環境が動物に提供している行動可能性を意味しているのである。

教育環境の問題に視点を向けると、田中¹⁹⁾は学校の教室の在り方を検討しつつ、机と椅子が前方の黒板に対して等間隔に配置されている従来型の教室が持つアフォーダンスは、イスに座り、前を向いて、黒板を見ながら、教員の話聞くことを意味付けていると指摘する。すなわち、一人の教員が、多数の生徒に対して一斉に、また一方的に、知的情報を伝達する場合に限っては、この教室はきわめて効果的な環境条件を備えているという訳である。このように、従来型の教室には教師が授業を進める上で有効な、すなわち教師中心の画一的な教育形態のアフォーダンスが散在している。学習形態の是非はともあれ、教室の在り方をアフォーダンス理論から捉える視点は、それをスポーツの教育環境の問題として議論する上でも極めて興味深い。

スポーツの教育環境、とりわけ学校においてスポーツを行う場としての校庭や体育館には、教師中心の教育実践に有益なアフォーダンスが散在している。校庭はいわゆる運動場としての環境であり、そこには生徒が整列するために有用な、また体育の授業時に教師が生徒全員に目を配るためのアフォーダンスが盛り込まれている。このような議論に対して、校庭の在り方それ自体を問う試みとして、仙田¹⁷⁾は校庭を子ども達の遊び場として捉え直すべきであると主張する。そしてそれは、

校庭のみならず、校舎、体育館、廊下、教室、屋上、プール等、様々な建築的空間を、子どもの遊び環境という視点で捉え直す必要性を提言するものである¹⁷⁾。それは、校庭ひいてはあらゆる学校内の環境のアフォーダンスを子どもの遊びという視点から捉える実践的な試みとして評価されよう。

アフォーダンス理論は、教育の「場」としてのスポーツ環境を見つめ直す重要な視点を提示している。スポーツの経験とは、身体と環境との相互作用の結果として生じるのであり、アフォーダンス理論はその知見を蓄積する格好のフィールドとして、スポーツ教育論の新たな理論展開を映し出しているのである。

デューイの経験概念における「相互作用の原理」に従えば、人間の経験をより豊かなものにすることは、その相互作用の対象としての環境を豊かにすることと無関係ではない。ギブソンのアフォーダンス理論によれば、スポーツする人間は環境からさまざまな意味を受容し、その過程で成長するのである。そしてそれは、「経験の連続的再構成の過程こそが教育（成長）の過程である」とするデューイの主張に深く傾注するものでもある。

V. スポーツ教育論と教育概念の再評価

本稿でのこれまでの議論からは、スポーツする人間は、環境のさまざまな意味を受容し、その経験の過程で成長し、さらには学びのための方法を習得するという結論を得ることができる。換言すれば、それはスポーツの経験を通して自ら学ぶ力を育むということであり、それこそがスポーツ教育論の新たな理論展開を支える本稿の基本的なスタンスである。すなわち、この学びの視点からスポーツの教育環境を議論することが本節の課題である。

教育学、特に教育哲学の研究領域では、近代学校教育の閉塞感に対して、「教え」から「学び」

への教育のパラダイムシフトが議論されている。例えば、佐藤¹⁵⁾ ¹⁶⁾ は「教え」ではなく「学び」を中心とする教育実践の必要性を訴えている。彼は「東アジア型教育の破綻」¹⁶⁾ という表現を用いて、戦後の日本教育の特徴である生産性と効率性を追求する工場システム型の学校教育の在り方や、受験戦争によるピラミッド型の学校の序列構造が既に破綻しているとして、その限界と弊害を指摘している。また、従来の教育における「知識・技能」の教育に対する「関心・意欲・態度」の教育、「教え（教師中心）」に対する「学び（子ども中心）」の授業観、「指導」に対する「援助」の授業観、「教科の系統」に対する「生活の総合」のカリキュラム観等、教育理念上の二項対立の構図を批判し¹⁶⁾、「勉強から学びへの転換」¹⁵⁾ ¹⁶⁾ を提言している。その提言は、教育の場としてのスポーツ環境、すなわちスポーツの教育環境の在り方を議論する上でも重要な視点であろう。それは翻せば、スポーツの経験を通しての学びへの議論が、現在の教育問題に対しても無関係ではないことを意味している。

最近、人々が自由にスポーツを楽しめるような河川敷や空き地などは漸次減少し、子どもにとってスポーツは一つの習い事へと転化しつつある。子どものスポーツ環境が抱える問題点について、新開谷¹⁸⁾ は、塾や習い事やスポーツ少年団、スイミングスクールといった大人が管理する組織に子どもが吸収されていることを批判している。また、永井¹³⁾ も、現代の子どもが置かれている、物事を「習う」という環境を批判している。このように考えると、現代のスポーツの教育環境についての問題点は、プラグマティズム思想の要点に倣えば、「人間はスポーツを経験し、その経験を通して自ら学ぶ」という視点の欠如と言ってもよいだろう。

スポーツの教育環境の在り方を検討する上で、従来のスポーツ環境整備の在り方に対する柳沢²²⁾ の批判は痛烈である。柳沢は²²⁾、従来のスポーツ環境の整備は期待される子ども像といった目的が

議論されないまま、その方法論的な側面にのみ関心が寄せられていたことを指摘する。すなわち、それは目指されるべきコンセプトの欠落の問題である。また田中¹⁹⁾は、学校における教育環境を適切にデザインする方法として「教育の理念、教育内容、授業形態、教員と学生の特性などを考慮したうえで、何が最適な環境なのかを議論し、デザインを調整する必要がある」¹⁹⁾と指摘するが、これも教育環境の在り方に関する同様な視点であろう。

スポーツ環境についての議論では、その「環境」概念の捉え方に二つの傾向が存在する。第1は、スポーツクラブ、運動部活動、地域のスポーツ活動等の運営組織、そこでの指導プログラムや活動プログラム、指導者、教師、参加者間の人間関係等、いわゆる社会的環境からの捉え方である。第2は、学校施設、公営・私営スポーツ施設、公園、広場、河川敷、空き地等、スポーツを行う場としての物理的環境からの捉え方である。すなわち、前者はソフト面からの、そして後者はハード面からのスポーツ環境の捉え方とされよう。とりわけ、「学習形態や学習内容というソフト面の改革には多くの議論が費やされてきたのに対し、教室のハード面の改善については、さして注意が払われてこなかった」¹⁹⁾という指摘は、スポーツの教育環境を議論する上での物理的環境という視点の重要性を言い表している。そしてそれは、スポーツを行う「場」の在り方を学びの視点から捉え直すということであり、よってそのような視点からは、私たちにとって身近で有用な学校の運動場や、スポーツ施設などはその在り方を見つめ直す必要がある。

例えば、建築家として小学校の環境設計を手掛けた工藤¹²⁾は、子どもを育てる環境の在り方について、設計者が遊びや学習の方法を押し付けるのではなく、そのきっかけとなる仕かけの種をまいておく必要性を指摘している。すなわち、遊びや学習においては、画一的な整備によって環境との相互作用を規定するのではなく、環境内に内在

するアフォーダンスを多様に準備しておくことが重要なのである。それはスポーツの教育環境であっても同様のことが言えよう。スポーツを行うために整備された環境であっても、その用途は多様なであり、従って環境との相互作用によって生み出される経験もまた多様なものとなるのである。

教育問題としての「学びへの視点」が注目される現在にあっては、既存の枠組みを超えてスポーツの教育環境を再構築していくことが求められている。その議論にあってこそ、プラグマティズム思想における経験、環境、教育概念を再評価し、スポーツ教育論の新たな理論展開の方向性を見据えることが重要なのである。

VI. ま と め

本研究では、スポーツ教育論の新たな理論展開をプラグマティズム思想における経験、環境、教育概念の再評価に依り検討した。プラグマティズムを再評価する基礎思想研究は、スポーツの現在の諸問題、あるいはその教育問題にアプローチする道筋を写し出している。そしてその議論は、スポーツ教育論を学びの視点から再構築するということに帰結する。「教え」から「学び」を中心とする教育への転換こそが、プラグマティズム思想の再評価に基づくスポーツ教育論の新たなパラダイムなのである。よってここでは、スポーツを通して自ら学ぶ力を育てるという教育理念を丁寧に実践する場としてのスポーツの教育環境の在り方が問われなければならない。このような議論からは、スポーツの教育環境、特に物理的環境としてのスポーツの「場づくり」が求められる。それは「学び」を中心とするスポーツの教育、そしてその「場」としての教育環境の在り方を探求するための議論である。既存の枠組みを超えたスポーツ教育論の在り方を提案しつつ、その理論化モデルを構築することがスポーツ教育論の課題であろう。

付 記

本稿は、プラグマティズム思想を再評価する意義に限定しての議論であることを付記しておく。その議論が依って立つスタンスについては、以下の拙稿を参考にされたい。

スポーツの「身体環境」概念の検討。体育・スポーツ哲学研究, 31 (2): 109-120. 2009.

「経験としてのスポーツ」に関する研究：デュエイ経験概念の再評価から。体育学研究, 56 (2): 297-311. 2011.

スポーツの経験的価値についての検討—プラグマティズム思想における経験概念の論議から—。体育・スポーツ哲学研究, 33 (2): 91-105. 2012.

プラグマティズム思想の再評価と体育理論。体育哲学研究, 43: 17-27. 2013.

スポーツの教育環境に関する研究。スポーツ教育学研究第33回大会号: 53. 2013.

注

注1) 『体育学研究』、『体育哲学研究(旧体育原理研究)』、『体育・スポーツ哲学研究』、『体育科教育学研究』、『スポーツ教育学研究』、『体育の科学』、『体育科教育』、『学校体育』において、プラグマティズム思想について直接言及した研究は限定的である。

注2) 有機体(身体)と環境との相互作用については、デュエイのプラグマティズム思想の潮流を背景に持つギブソンの「アフォーダンス理論」においても見ることができる。

注3) この点についてはデュエイが、「経験は継続して生起するが、それは生物と環境的諸条件の相互作用が、生命過程そのもののなかに含まれているからである」²⁾と述べていることから明らかである。

注4) デュエイ研究者である好並²⁴⁾もこの点について、「以前に増して意図的に制御可能な、それ故に多くの意味に充ちた仕方経験され得るものとするに寄与する」²⁴⁾と述べている。

注5) 一つの経験の蓄積についてはデュエイが次のように述べている。「このような経験(一つの経験)において、それぞれの継続する部分は、後に起きるもののなかに淀みなく、切れ目もなく満たされない空白もなく流れ入る。同時にそこには、各部分の自己同一性が失われることもない(括弧内筆者)。」²⁾

注6) ギブソンは地上の環境の「アフォーダンス」の

例として、「媒質」、「物質」、「面とその配置」、「対象」、「他人と他の動物」、「場所と隠れ場所」の6つを提示している⁴⁾。すなわち、空気、水、地面に加え、例えば、ボールは投げることをアフォードし、ある人間の行動は他の人間の行動をアフォードし、場所は棲み家や隠れ場所をアフォードするのである。

注7) 「生態学(ecology)」とは、生物の生活に関する科学を指すものであり、「生態学的環境」という場合には、動物の生活全般に関わる行動と関係する環境、すなわち、行動環境を示している⁸⁾。そしてそれはあくまでも、どこ(where)で行動しているかではなく、いかに(how)行動しているかに関係しているものである⁹⁾。

引用・参考文献

- 1) デュエイ：市村尚久訳(2004) 経験と教育。講談社：東京。
- 2) デュエイ：河村望訳(2003) デュエイ＝ミード著作集⑫経験としての芸術。人間の科学新社：東京。
- 3) 深澤浩洋・石垣健二(2010) スポーツにおける意味生成論—拡大体験の可能性とその契機—。体育学研究, 55 (1): 97-110.
- 4) ギブソン：古崎敬ほか訳(1985) ギブソン 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る—。サイエンス社：東京。
- 5) 早坂忠博(2010) 日本におけるデュエイ哲学思想の受容と発展。日本デュエイ学会編。日本のデュエイ研究と21世紀の課題—日本デュエイ学会設立50周年記念論集。世界思想社：東京。
- 6) 樋口聡(2013) 巻頭エッセイ「身体知」は体育をどう変えるか?。体育科教育, 61 (9): 9.
- 7) 井上誠治(1998) スポーツ経験の記述の方法。体育の科学, 48 (10): 802-806.
- 8) 河野哲也(2003) エコロジカルな心の哲学 ギブソンの実在論から。勁草書房：東京。
- 9) 河野哲也(2005) 環境に広がる心 生態学的哲学の展望。勁草書房：東京。
- 10) 河野哲也(2006) 〈心〉はからだの外にある「エコロジカルな私」の哲学。日本放送出版協会：東京。
- 11) 久保正秋(2009) 意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義。体育学研究, 54 (1): 183-196.
- 12) 工藤和美(2004) 学校をつくろう! 子どもの心がはざむ空間。TOTO出版：東京。
- 13) 永井洋一(2013) 少年スポーツ ダメな大人が子供をつぶす!。朝日新聞出版：東京。
- 14) 佐々木正人(2008) アフォーダンス入門 知性はどこに生まれるか。講談社：東京。
- 15) 佐藤学(2000) 「学び」から逃走する子どもたち。岩波書店：東京。

- 16) 佐藤学 (2009) 教育の公共性と自律性の再構築へーグローバル化時代の日本の学校改革. 矢野智司ほか編「変貌する教育学」. 世織書房: 神奈川, pp.271-291.
- 17) 仙田満 (1995) 学校を子どものあそび場に. 体育科教育, 43 (8): 26-29.
- 18) 新開谷央 (1999) スポーツをめぐる子どもと大人の関係論. 体育科教育, 47 (8): 23-25.
- 19) 田中彰吾 (2011) 身体知としてのアフォーダンスと学校空間論. 学校空間の研究, 1: 5-9.
- 20) 田中彰吾 (2013) 知の主体としての身体. 体育科教育, 61 (9): 10-13.
- 21) 柳沼良太 (2002) プラグマティズムと教育ーデューイからローティへー. 八千代出版: 東京.
- 22) 柳沢和雄 (1999) 子どもの可能性を拓くスポーツ環境. 体育科教育, 47 (8): 26-28.
- 23) 矢野智司 (1999) 非知の体験としての身体運動ー生成の教育人間学からの試論ー. 体育原理研究, 29: 108-112.
- 24) 好並英司 (1990) 経験についてー問題設定ー. 日本デューイ学会紀要, 31: 126-128.